

書評・紹介

森 章司著

『原始仏教から阿毘達磨への

仏教教理の研究』

吉 元 信 行

る著者の業績として次のような論攷が登録されている。

- (1) 「長阿含経解題」新国訳大藏経『長阿含経I』（大蔵出版）五～六四頁。
- (2) 「津蔵」の諸特性とインド文化」『アジアにおける宗教と文化』（東洋大学東洋学研究所編）四七七～五〇四頁。
- (3) 「原始仏教における真実と人間観」上・下」平和と宗教No.七、八。
- (4) 「諸行無常」と「諸法無我」東洋大学文学部紀要『東洋学論叢』第一五集・一～三九頁。
- (5) 「原始仏教経典の編集形態について——大乘仏教の九分・十二分教観——」東洋大学文学部紀要『東洋学論叢』第一三集・六五～八六頁。
- (6) 「原始仏教における縁起説について——その資料整理」中央学術研究所紀要（創立二〇周年記念号）第一八号・一～三五頁。
- (7) 「菩薩戒と大乘仏教教団」金岡秀友博士還暦記念論文集『大乘菩薩の世界』二五～四五頁。
- (8) 「諸行無常」と「諸法無我」の形成過程」宗教研究二八六・一三〇～一三三頁。
- (9) 「原始仏教における四諦説について——その整理——」大倉山論集第一〇輯・二一五～九八頁。この論文は便利な資料であり、筆者はコピーを製本して座右にしてきた。当然、本書には本稿が補正されて載録されている。

この度、東洋大学の森章司教授によって、原始仏教からアビダルマへの仏教教理に関する標記の玉著が上梓された。著者は文学部から大学院博士課程まで東洋大学で学び、それ以降継続して東洋大学で教鞭をとってこられた生粋の東洋大学人である。評者が印度学仏教学会等に出席するようになった当初の頃（昭和四五年頃）から、著者はほぼ毎回、原始仏教教理に関する地道な研究発表をされていたことを思い出す。著者には本書の出版までに、『異部宗義主題別分類対照表』（東京プリント社・一九七九年）、『仏教思想の発見——仏教的ものの見方——』（溪水社・一九九〇年）などの単著や『仏教比喩例話辞典』（東京堂出版・一九八七年）、『国語のなかの仏教語辞典』（同・一九九一年）、『戒律の世界』（溪水社・一九九三年）などの編著書があり、また、評者の論文データベースには、原始仏教に関する

これまでたまたま評者に興味ある論文として、データベースに登録したのだけである。また、の中には原始仏教以外の業績として、著者の次のような日本仏教に関する論攷も登録されている。

「歎異抄——親鸞の声・唯円の声——」「歎異抄」における親鸞と唯円」「近世仏教における正統と異端」「江戸時代における新宗教団」「異安心・能登頓成事件の顛末」「日本書記」にみる尼僧の戒律」「無常・無我の日本的受容」(出典省略)。

このように、著者には原始仏教研究だけでなく、大倉山精神文化研究所の研究員としての日本仏教に関する幅広い研究活動もある。

原始仏教やアピダルマ仏教に関しては、古くより著名な仏教学者たちにより、数多くの名著が出版されてきたが、著者が序論の冒頭に、「本書は原始仏教の教理とはいかなるものであり、それが阿毘達磨仏教の教理体系としてどのように形成されたかということ考察しようとするものである」と明確な表明をしていることからすると、原始仏教教理の研究という点で、本書は当然それら名著の中の一角を占めることになる。

著者は、ここで、「原始仏教の教理」という概念を「それを修せば悟境に達することができる」という、首尾完結し定型化されている、ひとまとまりのものとして認識されている。「教説」を意味する「(p. 21)」と定義し、具体的には、「四諦説」、「無常・苦・無我説」、「縁起説」を取り上げることが明らかにされる。この問題は、「仏教とは何か」という素朴な問題意識によって

著者に起きたものであり、その研究の過程において、その根底にあるものとしての「真実観」と「智慧」の考察に行き着いたのが本書の内容であることになる。

ところで、著者のいう「原始仏教」と「阿毘達磨」なる用語に関して、著者なりのはっきりした限定があるようである。すなわち、「原始仏教」とは、阿毘達磨論師たちが契経として扱い、教証として拠り所にした経藏(律藏)、すなわち、パーリ五ニカーヤと漢訳四阿含及びこれに関係する漢巴の律藏や単経であり、「阿毘達磨仏教」とは、南伝七論と説一切有部の六足発智及び「婆沙論」・「俱舍論」等であることを明示する。

ところで、著者も認識しているように、今日我われが見るこののできる原始経典とは、アピダルマの時代に編纂されたものである。そうすると、著者がここで原始仏教と言っている概念は、仏陀の時代やその直後の頃の仏教を意味しているのではないことになる。そこで著者は、「原始仏教から阿毘達磨へ」というのは、必ずしも思想的な態度ではなく、むしろ、阿毘達磨論師たちの意識上の次元であるという方がふさわしい(本書 p. 20)と述べている。このことは、原始仏教とアピダルマ仏教の間には決定的な断層はないという著者の仏教思想史観に基づいた結論であるという。しかし、今日の学界では、最初期仏教の研究が盛んであり、沙門の宗教、就中ジャイナ教などとの比較研究を通じて、この著者のいう原始仏教以前の最初期仏教の実像が明らかにされつつあり、このような観点からすると、著者の仏教思想史観も幾分修正を余儀されてくるかも知れない。

ただ、著者が、原始經典を嚴密に段階づけることに絶望感を抱いており、原始仏教教理の体系的の研究には經典の成立過程を一応丸ごと丸めて扱った方がよいという便宜上の理由であると控えめに述べているのは、このことを意識してのことかも知れない。いずれにせよ、標記の重要問題を扱う場合、現時点ではつきりした著者の立場を明らかにすることは必要なことであり、また、この段階で一書をまとめようとすれば、仮説的立場もやむをえないことであると云えるかもしれない。

二

ここで、評者の興味のおもむくままに、本書の章分けの順に内容を紹介しつつ、感じたことを述べることにしたい。

第一章 資料観 では、前項でも触れたような著者独自の仏教思想史観に基づく研究のための資料論が展開される。ここで著者は、あらためて、本書が定型化され首尾完結した教説を研究の対象とするのであって、個別のテーマに関する思想的発展はさして関心がないとした上で、阿毘達磨論師たちが「契經」とした經典群をまるごと「原始仏教」と称するため、その限りにおいては「原始仏教」の中には発展はないという大胆な資料論を表明する。このような資料論については、評者を含めかなり異論のあるところであろうが、著者はあえてこれを「資料観」と称して、そのような詮索を拒絶しているかのようであるので、まずは著者の所論に耳を傾けてみよう。

著者は、このような資料観に基づけば、諸資料の原型や発展

段階に関する資料論は不必要であるとしながらも、一応、従来の種々の原始仏教資料論を踏まえて、原始仏教經典の形成、原始經典の編集形態としての九分教・十二分教の諸問題について著者の立場を明らかにしている。原始經典の形成に重要な役割を果たしているのが「結集」という經典編纂会議であることは異論のないところであるが、史実として認められている第一結集と第二結集において編集された經典の形態が四阿含とか五二カーヤというような經典の長短・テーマによって編集された「アーガマ」であったのか、あるいは、教説の内容や形式からの分類である「九分教・十二分教」であったのかについては未だ決着の付いていないところである。

この点について著者は、まず、原型の三蔵は紀元前二世紀半ばには成立しており、アーガマの分類も九分教・十二分教の原初的な概念も部派分裂以前に成立していたとし、それが現在の形にまとめられたのは部派仏教の時代であるとしている。また、釈尊の説法が説法の方法によってこのような時代に九分・十二分教という形で伝えられ、それが後に分量や全体・部分によって四部四阿含という形にまとめられたとする。さらに、大乘仏教における九分教・十二分教観について諸資料を点検し、原始經典における具体的・固定的内容を有する編集形態は四部四阿含しかなく、九分・十二分教は原始仏教・大乘仏教に通ずる仏説の抽象的・観念的なジャンル分類の方法でしかなかったとする。そうすると九分・十二分教の一一の概念もこのようなアビダルマの時代に確定されたことになるから、そのような意味で

の「原始仏教経典」を扱うという資料観をあらためて確認しているのである。

このあと、第三節「説一切有部系統の原始経典」が本章に加えられ、新・旧訳『婆沙論』に引かれた契経と現存漢巴原始経典との比較研究がなされる。ここでは、現存阿含・ニカーヤの中では中阿含が『婆沙論』所引の契経に最も近いとしているが、前二節とは幾分おもむきを異にした感は否めない。しかも、現存する諸論書の中には多くの契経が引用されており、何故『婆沙論』だけに限定したのかの理由も明確でない。このような問題については、『俱舍論』に引用された契経すべてを網羅した『ウパーイカー』という『俱舍論』の注釈のチベット訳が現存しており、それについては既に本庄良文氏などによる詳細な紹介・研究が逐次発表されてきているので、それらの業績も踏まえた論究の欲しかったところである。そうすれば、契経の性格とそれが原始経典と呼びうることの意味がはっきりし、前二節との関わりももっと明らかになったであろう。

第二章 原始仏教における真実と智慧 では、真実と如実知見、及び五蘊と五取蘊についての諸問題が論究される。著者は原始仏教における真実を、四諦説や無常・苦・無我説のような「事実としての真実」と縁起説のような「永遠不変の理法としての真実」という二種類あったが、後者は固執される見解に陥る危険性のため法と呼ばれ、「如実知見」としての智慧の対象はもっぱら前者が挙げられたとする。このような真実観に基づいて人間を見た場合、無漏なるものが五蘊であり、五取蘊は有

漏であり、苦であるというように総括される。そして、真実という立場からする人間観によると、まさに五取蘊とは欲貪を内在した有情、すなわち凡夫を意味する。それに対して、原始仏教の修行道によるこの五取蘊の滅・出離が、無漏の五蘊存在たる覚者のあり方であるということになる。

ところで、この章で著者は、パーリ聖典の中から真実を意味する言葉 (yathabhucca, bhuta, taecha, tatha, socca, yathava tahiya, tahata, tadin) を含む経文を抽出し、その意味の上からの分類を試みている。その中で、真実という語が事実・不虚証という意を表すとして列挙されたものを「極めて現実的に相対的な枠の内 で用いられており、ただ単に嘘や虚偽ではなく、事実であると言うほどの意であろう」(p. 101) と述べているが、この概念は、広くバラモン教世界を含んだ通インド的背景において、絶対的な力を持つとされた「真実語 (sacca-*vada*)」の概念であるとすると、決して「事実であると言うほどの意味」どころではなく、インド仏教思想史における大きな位置を持つことになろう (村上真完「何が真実であるか——ウパニシャッドから仏教へ——」東北大学文学部研究紀要第四三号・一―五三頁参照)。

第三章 四諦説とその展開 では、原始経典に説かれる四諦説を整理分類して、そのアピダルマ仏教への展開を検証する。特に、第一節の「原始仏教における四諦説——その資料整理——」は、著者が抽出した四諦説すべてに通し番号をつけて、昭和四十七年に発表された論攷を基にしているが、その後に発見

された資料を追加し、また、削除すべき資料の通し番号は欠番になっている。この資料の収集にあたっては、著者も相当の時間をかけたようであり、「これらはまた四諦説研究のための資料索引としても利用されようであろう」(p. 175)という願いも込められている。ここでは、アラビア数字(パーリ)・漢数字(漢訳)の通し番号のつけられた四諦説が次の六つの類型に分類される。(一) 苦の四諦の三転十二行相型、(二) 苦の四諦の示転型、(三) 苦の四諦の勸転型、(四) 苦の四諦の証転型、(五) その他の四諦、(六) 四諦に類した教説。この後、これらの四諦説が「発智六足論」から有部阿毘達磨論書にどのように展開したかを、有部の修行道体系、四諦十六行相の形成などの問題を通じて検証する。

この作業をするにあたって、著者はある発展段階を予想して跡づけようとしたようであるが、結局秩序立った跡づけをすることはできなかったという。しかし、冒頭で問題にしたような著者の資料観からすると、原始経典そのものがアビダルマ的変容を経て編集されたものであるから、そのような資料から発展段階を導き出すことは不可能であろうし、それには別の方法論を用いる他はないであろう。

第四章 「無常・苦・無我」説とその展開 では、前章と同じ方法論で、無常・苦・無我に関する経説を遺漏のないように収集し通し番号をつけ、分類している。ここでは、無常・苦・無我の教理とそれに涅槃寂靜を加えた「三法印」「四法印」との関連が論じられる。著者は、無常・苦・無我の教理が始めに

成立し、涅槃寂靜の加わった四法印が原始経典形成最後期もしくは阿毘達磨初期に成立し、それが北伝阿毘達磨において、次第に三法印に変化しつつ定着したと結論する。ところが、何故「涅槃寂靜」なる概念が加わったのが後期であるのかについては論究されていない。実は、涅槃寂靜が最初期仏教における最終目標であったかどうかについては未解決の問題があるのである。

ただ、無常・苦・無我の教理と法印との関連については、古くはラモット博士が『大智度論』のフランス語訳において注目し、それに示唆を受けて、袴谷憲昭教授が詳しい考証を加え(『法印』覚え書) 駒澤大学仏教学部研究紀要三七号)、また、藤田宏達博士も三法印と四法印について詳しい論証をしている(『三法印と四法印』橋本博士退官記念『仏教研究論集』昭和五〇年・一〇五―一二三頁)ので、それらの業績をふまえた考察を加えてほしかったと思う。また、ここで著者は、無常・苦・無我に関する『ダンマパダ』二七七―二九九偈、およびその関連資料についての考察をしているが、評者もかつて、これに「空」なる概念を加える偈のあることと、『アビダルマデーバ』との関わりについて詳しく論述したことがある(拙著『アビダルマ思想』法蔵館・昭五七年・六〇―六六、三二六―三三二頁参照)。

このあと、原始仏教における「無常・苦・無我」説、及びその意味が検討され、さらに、諸行無常と諸法無我なる対句について考察される。そして、この章の最後に、南方上座部におけ

る「無常・苦・無我」説が検討され、南北両伝のアビダルマにも、その修行道体系において縁起説が無視されているところに注目し、次の章への橋渡しとする。

第五 縁起説とその展開

では、原始經典に説かれるあの膨大な縁起説について、その教説が検索され、整理・検討される。原始經典における縁起については、その説かれる箇所があまりにも多く、また、様々であり、それに関する研究もことさら多く、我われはその膨大さゆえに、研究の対象として取り組むことを躊躇せざるを得なかったが、著者はあえて正攻法からこの課題に取り組んでいるのは敬服に値する。原始仏教における縁起に関する従来の研究の中で、最も網羅的に整理された研究としては、三枝充恵博士の『初期仏教の思想』（東洋哲学研究所・一九七八年）があるが、本章ではこの三枝博士の業績に基づいて論旨を展開している。縁起については、今から一五年ほど前、十二縁起が原始仏教で説かれたかどうかをめぐる、『中外日報』誌上で、この三枝博士、舟橋一哉博士、宮地廓慧氏との間で、三つどもえの論争が展開されたことを思い出す。本章では一応三枝博士の所説に賛同している。なお、この論争については、後に梶山雄一博士がわかりやすく整理してまとめ批評を加えている（「縁起説論争——死に至る病——」東洋学術研究二六号・一九八一年）。

この章でも、著者は前章までと同様に、縁起説を定義した上で、その教説を原始經典から検索し、それらに通し番号を付し、いくつものグループに分類している。そのうえで、縁起説を理

法としての「縁起」と、十二縁起説を典型とする教説としての「縁起説」とに区別してとらえることを提唱する。そして、「縁起」は事実というよりは永遠不変の理法であり、釈尊の自内証にして甚深であつて、釈尊はそれを衆生に説くことを躊躇されたものであり、仏弟子の觀察すべきものではないと伝承されるようになったとする。それに対して、十二縁起などとして示された「縁起説」は、「縁起」としての立場から、有情の苦がどのようにして生ずるのか、またそれをどのように滅すことができるのかを衆生に示そうとした「教説」の中の一つにすぎないと結論する。したがって、「四諦」や「無常・苦・無我」の教説が原始經典からアビダルマ論書に至るまで固定した教理になっていのに対して、「縁起説」は、十二縁起だけでなく、八支・九支・十支縁起などの様々なヴァリエーションが見られ、また、アビダルマなどでは、原始經典には見られない「六因四縁五果」説や「二十四縁」説などの縁起説が創説されるようになるとする。アビダルマにおける十二縁起の生理学的・胎生学的解釈などは、通俗的なところがあり、まさにそのことを意味するのであろう。

この後、縁起の滅と悟りの縁起についての若干の考察がある。周知の如く、十二縁起は有為なる迷いの世界の仕組みをあらわす順観（生起門、流転門）と、無為たる悟りの世界に至るための逆観（還滅門）として説かれるが、縁起が有為なる世界の仕組みをあらわす以上、還滅門たる縁起の世界は縁起ではないこととなる。しかし、著者は原始經典に悟りの縁起とも称すべき

若干の資料のあることを指摘し、そこに大乘的縁起説の萌芽を見出そうとしていることは注目される。そして、無明の滅を明の生起と位置づければ、その底に戒や定などの修道の基本が存在するとし、次章への橋渡しとしているのである。

第六章 部派仏教における修行道論 及び **第七章 悟りの段階とその修行道** とは、原始仏教とアビダルマ仏教における修行道の体系と修行の結果としての涅槃寂靜についての考察である。この第六章の内容に関わる業績として、最近、田中教照博士が『初期仏教における修行道論』（山喜房・一九九三年、拙書評「本誌五八号参照」という大著を上梓したところであるのに、本章がわずか一八頁にとどまっているのに奇異な感を受けたが、読んでみると、説一切有部と南方上座部を除いた、現存資料の少ない他部派の修行道について知りうる情報を整理するということで設けられた章であるとのことである。ここでは大衆部系の諸派を中心に、三乗、四諦現觀、正性決定など、大乘の思潮に関わる概念が問題にされる。そして、第七章では、修行の結果としての悟りの諸段階が検討され、さらに涅槃寂靜なる仏教の最終目標が問題とされる。

ここで著者は、原始仏教における寂靜 (santi) に、(1) 究竟寂 (accanta-santi) (2) 彼分寂 (tadanga-santi) (3) 世俗寂 (sammuti-santi) の三段階のあることに注目する。そして、究竟寂は涅槃のことであり、彼分寂とは、心解脱・慧解脱・俱分解脱等を成就した聖者位の寂靜を言い、世俗寂は凡夫位の一時的な寂靜を意味するとする。この点について、解脱や

涅槃が元は究竟寂のみを意味するものであったものが、後世に様々な未完成な解脱や涅槃を形成するようになったという立場に立って、涅槃寂靜についての考察を進めていく。ただ、涅槃を実有と考える説一切有部では、涅槃に有余・無余以外の段階があり得るはずもなく、以下の所論は、涅槃の非有部的考察とでも言おうか。評者も、アビダルマにおいてこのような涅槃觀があり、特に彼分涅槃や彼分寂について、大乘アビダルマ思想との関わりで問題にしたことがある（前掲拙著二六五―二六九頁参照）。

著者はここで、涅槃について、「santiたる涅槃は、決して死を意味するのではなく、この世で煩惱を断じ尽くした時、その時に得られるべきものである」とし、さらに「涅槃ⁱⁱ Santiの境は、我であるかどうかはしばらく措くとして、少なくとも常・楽・浄と把握されるべきものである」(p. 66) と理解している。そして、様々な原始經典を典拠に、釈尊の教えは、万人が涅槃に達することを教え、その涅槃は釈尊の涅槃となら変わりになく、現世のうちに悟るものであり、むしろ常・楽・(我)・浄と把握されるべき積極的内容をもつ境地であると結論する (p. 66) 。まさに大乘涅槃經の涅槃觀そのものである。涅槃が「我であるかどうかはしばらく措く」と言い、また、「常・楽・(我)・浄」の「我」を () に入れるところは、仏教が「無我」を説き、また、本書が「無常・苦・無我」説を基本としているところからの躊躇だと思われるが、涅槃が我であるかどうかの所論はこの後もなされていない。むしろ、第四章第五

節では、涅槃の常・楽・淨の問題が取り上げられ、涅槃は無我であることとえられたと記述する (p. 490)。この涅槃とは何かという問題は仏教学の最重要問題であるので、ここで改めて取り上げる紙幅はないが、他の資料を検索すれば、ここで著者が述べるような大乘的涅槃観とは全く逆の結論にもなりうるはずである。著者の視点とは異なる、思想史的観点からする仏教教理の理解については、評者はいつも論攷をまとめる都度問題にしているつもりである。この問題点については、最後のまとめでもう一度触れることにしよう。

三

以上、本書の論述に従って評者の興味のおもむくままにその概要を紹介した。七〇〇頁を越える大著をわずかの紙幅で紹介したため、遺漏のあることを恐れるが、重要なところはほぼ紹介したつもりである。当初から述べてきたように、本書は、無常・苦・無我、四諦、縁起、涅槃寂靜というような原始仏教における基本的教理を一切経の中から検索し整理検討した極めて基礎的な資料的研究である。特にその整理にあたって、各教理項目に通し番号をつけているのは、後学にとってたいへん便利である。このような資料の検索と番号付けは、研究者にとって決して一朝一夕にはできるものではない。著者が研究者として駆け出しの頃から、地道に学界で発表してきたその成果をここに一書としてまとめたものであるから、本書の完成までに要した労力は大変なものであったらうと察せられる。その意味で、

本書は読書というよりは、原始仏教・アビダルマ仏教の学習者・研究者のための座右に置くべき資料としての価値があらう。ただ、せっかくの索引が、見出し語だけの索引で、よく整理されてはいるが、資料とするには、和文八頁、ローマ字一頁では貧弱すぎるように思う。別にバーリ語索引がほしいところであった。

最後に、読後の感想を一言述べておこう。評者が冒頭で幾分危惧を感じつつ紹介したように、著者は原始仏教とアビダルマ仏教の間には決定的な断層はないという独自の仏教史観で本書を出発している。それだけに、前項の最後でも問題にしたように、原始仏教からアビダルマへの仏教教理が、実到大乗的な意味付けとなって集約されてくるのである。そのようなところに、本書の最後に次のような結語として述べられるようになる。

このように現世否定的にしか見えない原始仏教にも、その底には現実のこの人生においてこそ悟りは実現されなければならないという、当然といえは当然の、力強い世界観があったことを見逃してはならない。ここにこそ大乘仏教の經典が、積極的に仏の境涯を表し、仏国土のすばらしさを描写して、その如実知見を進める土壌を見い出すことができやう。(p. 700)

著者はこう結論するけれども、やはり、涅槃は常・楽・我・淨であるとは必ずしも言わない原始經典もあり、また、ごく普通の原始經典やアビダルマ論書では、我われは現世には仏になることができず、仏になるには宇宙的時間と努力を要すると説

くのである。この点について著者は、現存の原始経典は部派仏教の要素も紛れ込んでおり、これが様々な誤解をもたらすことになった（p. 666）としているが、それを誤解と断つていいか問題であろう。むしろ、そのことを検証していくのが思想史研究であり、文献学的研究であるはずである。原始経典における仏教教理のあの多様性を説明するには、やはり、著者が原始経典を厳密に段階づけることに絶望感を抱いていると言うけれども、思想的なアプローチ、さらには、社会的、心理学的、哲学的な総合的アプローチによってこの説明は可能となろう。それがこれからの原始仏教という学問になると思う。

ともあれ、本書は、この種の研究書としては、三枝博士の『初期仏教の思想』以来の大著である。三枝博士は同書で「初期仏教思想の私的解釈」と断つた上で論旨を展開しているが（同書一八一頁）、本書は冒頭で触れたような「著者の仏教史観」でなされた、最初期仏教の教理ではなく、アピダルマのもしくは大乘的立場で編集された現存する原始経典に説かれる仏教教理の網羅的研究書である。インド仏教のみならず、広く仏教教理を学ぼうとする人の座右に是非置いてほしい本である。

（一九九五年三月、東京堂出版刊、A5判、英文要旨・目次二二頁、本文七〇三頁、定価一六、〇〇〇円）